からしだね

2022年6月号
(581号)

キリストの受難　カトリック池田教会
主任：ノノイ・プラザ神父
住所：　〒563-0041　　池田市満寿美町9－26
TEL　：　072-751-2400　FAX：072-753-4624
URL(ホームページ)：http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm

本号の記事の主題など

染野治雄司祭による巻頭言
「使徒たちと共に歩む復活節」
6月のガラスケースのみことばと解説
大人の日曜学校　復活節第2主日
みんなの談話室
　ホセア書を読んで
宝塚黙想の家からのお知らせ
今月の表紙の絵について

巻頭言

使徒たちと共に歩む復活節

染野治雄　司祭

５月といえば、青空に新緑が映える季節ですが、今年はなんとなく雨の日が多いように思います。しかし一方で、黙想の家では木々の緑が雨に濡れてより生き生きとした姿を見せています。一口に緑といってもさまざまです。微妙に異なる色合いの緑の葉が湧き立つように生い茂るさまは、キリストの復活の命が世界のさまざまな人々のなかへ広がってゆく現実を感じさせます。

復活節に読まれる使徒言行録には、使徒たちの働きによってキリストの教会が生まれ、育ってゆくありさまが描かれます。復活節とは、いわばイエスによって集められ、聖霊を受けた使徒たちによって教会がどのようにして生まれ、育ってきたのか、その成長の過程をわたしたちも使徒たちとともに追体験するときであると言えましょう。

しかし実際、福音の宣教はそのはじめから困難の中にありました。キリスト教信仰は、まずその母体であるユダヤ教から異端とされて迫害を受けます。またローマ帝国からは社会的、政治的に危険な運動とみなされます。そのほか異端的な思想や宗教の誘惑もありました。使徒言行録の後半になると、このような状況を背景にして、新たな福音の担い手としてパウロやバルナバたちが登場してキリスト教が異邦人の世界、すなわち西方ヨーロッパ世界へと広がってゆくようすが描かれて行きます。

このようなキリスト教信仰の異邦人世界への宣教は全くのゼロの状態から始まったわけではありません。すでに地中海を囲む国々の大きな町にあったユダヤ人共同体、すなわちディアスポラを拠点にして広がってゆきました。

ステファノの殉教をきっかけに始まったエルサレムの教会への大迫害によって、多くの信者はエルサレムを離れいろいろな地方に逃れてゆきます。「散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた」（使徒8章）と書いてあります。エルサレムを追われたユダヤ人たちは各地のユダヤ人共同体へと移り住み、そこで信仰を伝えて行ったのです（使徒8：4）。

そういうディアスポラのなかで、キリスト教宣教の一大拠点となったのがシリアのアンティオキアであることは使徒言行録に書いてある通りです（使徒11：19）。シリアのアンティオキアは、ギリシャ文化・学問の中心地のひとつである大都市でした。シリアと言うと、今は内戦で破壊されて２千年前の栄華は見る影もありません、なんだか悲しく思います。

こうして、パウロとバルナバはアンティオキアを拠点にして、ギリシャなど西方世界へ宣教旅行に出かけて行ったのです。「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになった」（使徒11：26）と書いてあります。“キリスト者（クリスチャン）”という呼び方は、元々は蔑称、つま

りなにやら怪しげな儀式をする宗教と見られて、信者は軽蔑の意味をこめてこう呼ばれていたそうです。そんな蔑みのことばであった、“キリスト者”が、のちにはキリストを信じる者たちの自己表明のしるしになりました。

さかのぼってみれば、ディアスポラの歴史も、バビロン捕囚をはじめとしたユダヤ人の負の歴史を背景にして生まれたものです。パウロの異邦人への宣教もユダヤ人からの拒絶を契機にして始まりました。こうして、キリスト教信仰の運び手はユダヤ人から、ギリシャ人、ローマ人へと移ってさらに広がって行くことになるのです。

このように良くない出来事、歴史を背景にして福音が広がっていったことはとても意味深く思います。初代教会の発展の歴史を見ると、拒絶、迫害、誘惑など良くない出来事をきっかけにして、それが宣教を進める原動力となったことがわかります。良くない状況に見舞われても、そこから逃げるのでなく、またあきらめるのでもなく、忍耐強く信仰を語り伝え、信仰を生きることにより、新たに発展していったことは、いまのわたしたちにとっても学ぶべき大切なことでしょう。

ところがキリスト教が発展してゆくそのいっぽうで、その母体となったユダヤ教、ユダヤ人は逆に迫害される立場に置かれてしまいます。なんだか少し悲しい気がします。というより、すでにユダヤ人は歴史の中でつねに追放される身の上にありました。パウロの協力者となったプリスキラとアキラもローマから追放されたユダヤ人であったと書いてあります（使徒18：2）。このこともまたキリスト教宣教の一つの助けとなりました。

ちなみに、ミュージカルで有名な『屋根の上のバイオリン弾き』は、帝政ロシアの支配下にあったウクライナのある町を舞台にしたユダヤ人一家の物語です。ロシアによってユダヤ人たちは、自分たちの住んでいた場所から追い出されてしまいます（1882年）。ロシアだけでなく、19世紀末にはこのようなユダヤ人排斥は、ヨーロッパ全体に及んでいました。それでも、彼らは神への信頼を失わずに、忍耐強く信仰を保ち、希望を失わないで、新しい約束の地を目指して荒れ野へと旅立って行きました。たとえ悲痛なこと、不条理なこと、つらいことがあっても、信仰に踏みとどまり神への信頼に生きることを、ユダヤ人から学ぶことができます。創世記の終わりで、ヨセフは自分を迫害した兄たちに言いました。「あなたがたは悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」（創世記50：20）。このユダヤ教信仰からキリスト教が生まれました。ユダヤ教も、またキリスト教同士も、同じ神さまを信じる者がまた一つになることができますように。

６月のガラスケースのみ言葉

富める人のほうが貧しいと思うときがあります。
富める人のほうが内心孤独であることが多いのです。

マザー・テレサ

（福音宣教委員会撰）

６月のみ言葉についての解説　　ノノイ・プラザ神父

金銭的に困窮することは辛いことです。誰もこのような状況に陥りたくありません。貧困に陥ると、人間的な生活を送ることが困難になります。ですから、好むと好まざるとにかかわらず、お金にまつわることは何かにつけ私たちにとって大切なことです。

貧しいこととそれに伴う悲しみは、単なる物質的な不足以上のダメージをもたらします。一方で、お金や物を所有している裕福な人が幸せであったり、人生に満足しているかというと必ずしもそうではありません。物が満ち足りていても明らかに何かが欠けていると感じている人が多くおられます。

このように考えると、マザー・テレサが「富める人のほうが貧しいと思うときがあります。富める人のほうが内心孤独であることが多いのです。」と語った時、何を言おうとしたのかが分かるように思います。

貧困は単なる物質的なものだけではなく、精神的、感情的、そして知的な貧困も存在します。お金や物を所有することだけでは得られない、喜びや満足があるのです。

このことを理解することによって、現代の私たちは、物質主義の連鎖から抜け出すことができるようになるのです。
それは誰もが私達から奪うことができない人生における真の豊かさや価値を見い出すことです。そしてそうすることによって私たちの魂に静けさと喜びを取り戻すことができ、極端な孤独や不幸に陥ることがなくなるでしょう。

私たちが人生を終えるときに本当に必要なものは比較的少ないでしょう。人生で本当に価値のあるものは、実のところ、お金では得られないのです。即ち、それらは私たちの家族や周りの人々とのつながり、健やかな心、そして私たち一人ひとりに与えられた大切な役割を心を込めて果たすことによって、世の中に貢献することで得られる喜びなのです。

大人の日曜学校　復活節第２主日の福音：ヨハネ 20：19～31

「あなたがたに平和があるように」

コロナのため、なかなか開催できなかった大人の日曜学校が復活節第２主日ミサ終了後にカール記念館２階和室でようやくひらくことができました。

当日の福音ヨハネ20章19～31節を読み、みんなでわかちあいをしました。キリストは、おびえている弟子たちに現れて何度も「あなたがたに平和があるように」と言われます。

今ほど、このことばが心に深くひびくことはありません。

いったいどこに平和があるのかと思えるこの世界に、今も平和があるようにとわたしたちによびかけておられるキリストにもっと向き合わねばと思いました。

24節からのイエスとトマスの箇所でのわかちあいでは、みなさんの体験と本音がでました。信仰宣言をとなえていてもなかなか信じきれていない自分がいる.....そもそも信じるとは...みなさんの話を聞いてトマスのような弱いわたしたちだからこそともに歩んでいくことの大切さを感じました。

研修委員会

みんなの談話室

ホセア書を読んで　インマヌエル

二〇二〇年三月以降はコロナ禍のために主日のミサに与れないことが三カ月も続くことがあった。「聖書と典礼」を教会聖堂玄関でピックアップして、主日の福音を二度、三度と独りで読んだり、カトリック中央協議会のウエブサイトで教皇様による回勅や「福音の喜び」、種々の記念日などに語られたメッセージなどを読んでみても、苦も無く読み進めるものではなかった。

老年の受洗者が独りで読む代わりに、池田教会の信徒さんが勧めるままに、幼稚な感想やとんでもない勘違いでもやんわりと指摘してくれる優しい人に巡り会えたのは聖書百週間の集いやノノイ神父さまの説教を聴いた直後の「大人の日曜学校」のワイワイと言い合える会であった。そして、一年ほどみなさんのお話を聞いている内に辿り着いた神さまのみことばや主日のミサの福音を分かち合うのは簡単にできることではないが、神さまがお傍で見守っているように思いこんで励んでみたこともあった。

四月三日十三時に開催された四旬節黙想会において、ノノイ神父様は「神はその独り子をお与えになるほど世を愛された」と題したテーマで、老若男女が混じる信徒の皆さんに理解できるように準備された講話をスクリーンに投影しながらゆっくりと六十分弱の講話をされた。二日十七時と三日八時半、十時半からと三回に分けて主日ミサが開かれて、十三時からの黙想会への五十名程度の参加者と予想されていたので、出席できない信徒のために講話全文を音声録音し、文字化を検討していたが、六十分弱の長時間の書き起こしを短い日時で行うのは大きな困難が予想された。ところが、八日に突然に講話全文の原稿が届けられ、『からしだね』四月号の発行日に八ページの号外として発行することができた。五年前に池田教会の司牧チームに加わられて以来、ミサの説教について幾度かお願いしたのだが、種々の理由があってその読み上げられていた原稿を戴くことはなかったが、神父様がこの大きな機会を逃されなかったのを知った時は嬉しかった。

上記の号外でもノノイ神父様が紹介された紀元前八世紀のイスラエル北王国の小預言者ホセアによるホセア書六章の一～六節には主を知ることの大きな喜びを繰り返し、わたしの気まぐれな思いは赦されると慰めている。

「さあ、主のもとに帰ろう。
主はわたしたちを引き裂かれたが、癒し、
打たれたが、包帯を巻いて下さるから。
主は二日の後、私たちを生かし、
三日目にわたしたちを起こされる、
わたしたちは主の前に
さあ、主を知ろう。
主を知るために努力しよう。
主は暁が必ず訪れるように現れ、
雨のように、地を潤す春の雨のように、
わたしたちに望まれるであろう」。
エフライムよ、お前になにをしたらよいか。
ユダよ、お前になにをしたらよいか。
お前たちの愛は朝の雲のようであり
すぐに消える露のようである。
それ故、わたしは預言者たちによって彼らを切り、
わたしの口の言葉によって彼らを殺した。
わたしの裁きは光のように輝く。
わたしの望むのは犠牲ではなく、愛である。
わたしの望むのは焼き尽くす捧げ物よりも、
人が神を知ることである。

宝塚黙想の家からのお知らせ

■ 日帰り黙想会　10：00～15:30
6月14日（火）　指導：稲葉 善章 神父
6月23日（木）　指導：染野 治雄 神父
6月24日（金）　指導：山内 十束 神父

■ 一泊黙想会
6月24日(金) 17：00～25日（土）15：30
指導：染野 治雄 神父

■ カトリック教会のカテキズム
第２･第４ 水曜日　10:00～12:00
指導：染野 治雄 神父

■ 聖地エルサレムを学ぶ
第３木曜 10時～12時、
指導 笹田六合豊 修道士

■ ギリシャ語で味わう聖書のことば
第１火曜 10時～12時,
指導 稲葉善章 神父

■ 聖書の基本
第１･３ 水曜日 10:00 ～ 12:00
指導：山内 十束 神父

上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797（84）3111

表紙の絵について

この有名なザビエルの肖像画は、1920年に茨木市千提寺の東藤次郎家で発見され、1935年に池永孟氏（池永潤大司教の父君）が資金をかき集めて購入したものである。現在は重要文化財として神戸市立博物館に所蔵されている。

聖フランシスコ・ザビエルは1549年にインドのゴアからジャンクで日本にたどり着き、鹿児島市で初めてキリスト教を伝えた。日本各地で布教したあと、いったんゴアに戻り、中国の布教を目指したものの、病に倒れ、途中の上川島で天に召された。1552年、46歳のときであった。16世紀末にオラツィオ・トルセリーノが「ザビエル伝」を著した。そこにはゴアで目撃されたエピソードが語られている。ザビエルが教会の庭で黙想しているとき、神の愛に触れて意識を失った。我に返ったザビエルは熱く腫れあがった胸を開いて、「じゅうぶんです、主よ、じゅうぶんです（Satiest Domine, Satiest」と叫んだという。

その伝記に付けられた銅版画が初期のザビエル像の典型として流布された。しかし、この江戸初期の日本人絵師が描いた洋風画は、燃える心臓と十字架を加えて、独自のものとなった。下部には「聖フランシスコ・ザビエル　イエズス会会員」とラテン語で記され、さらにその下の黄色の紙には、万葉仮名で「聖フランシスコ・ザビエルのサクラメント」と書かれている。最後の「漁父環人」はローマ教皇の意と思われる。神戸市立博物館では、年に一度、一定期間に本物が展示されるそうである。

編　集　後　記

わたしたちは毎日、「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」と主の祈りをとなえる。でもわたしの人生で、日ごとの糧が与えられなかった日が何日あっただろか。第二次世界大戦が終わった直後、確かに食べ物が手に入りにくい時期があって、母親がうすいおかゆに菜っ葉を入れ、なにやらあやしげな粉を加えて量を膨らませ、食卓に出したものだった。母親はわたしの茶碗にそのおかゆをよそってくれて、わたしは無邪気におかゆをお腹いっぱい食べた。その間、母親は自分の箸を取らず、わたしが食べ終えるのを待っていた。その経験は胸に刺さり、今もありありとその光景が目に浮かぶ。

それ以来、日ごとの糧を頂けるありがたさをあまり実感することなく、今日まで過ごしてきた。水も食料も尽きた戦いの中や、旱魃に苦しみながら生きる人たちもいるのに、それは神に感謝してもしきれないお恵みである。そして、困難の中にいる人々のために祈ろう。「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与え下さい」と。

ソフィー